

分野を超えて対話可能な言語表現を

著者	杉田 繁治
雑誌名	日本語科学
巻	13
ページ	3-3
発行年	2003-04
URL	http://id.nii.ac.jp/1328/00002099/

分野を超えて対話可能な言語表現を

杉田 繁治

この地球上には少なくとも4000を超える民族が生活しているといわれている。異なる言語の数もそれに対応している。方言などを異なりに数えると言語の数は更に多くなる。同じ言語の中でも単語レベルでは、時代、世代、地域、グループ、などによっても異なる場合がある。業界用語などその仲間内でしか通用しない符丁のようなものもある。このように多様な言葉が行き交う社会において民族、年代を超えて人々が互いに自由に打ち解けて生活がしていけるようになるのは不可能に近いような気がする。

国際的な言語になりつつある英語といえども日常生活で通じるのは人口的に言えば世界の一割程度ではなかろうか。中国語などは人口としては多いが異文化への広がりはい少ない。私は約35年前に機械翻訳の研究を行なったことがある。当時の技術レベルから大きな進歩があり、現在ではパソコンでも機械翻訳がかなりできるようになっている。文法構造的にはかなり進んでいるが、意味の領域に入り込むと途端に怪しくなる。人工知能としては夢のある研究であるが、実用のことを考えると前途遠慮の気持ちになる。

同じ日本語を使っている互に通じないケースが身近かに存在していることに驚くことがある。人々の交流範囲が広がると、経験を異にする人との出会いが増える。同じ単語を使っている、分野の違う人が対話をすると思わぬ誤解を生じていることがある。誤解であると気がつけば相互の意味の異なりを正すことができる。しかしそれぞれがそれぞれの意味に固執しつつ対話をしていると同床異夢を生むことになる。学際的な研究の場では新たな展開が得られないままに終わってしまうことになる。「文化」、「文明」、「情報」、「科学」、なども互いに異なる意味を持ちつつ話されている場合が多い。

コンピュータの分野で使う「ライブラリー」は日常使う「図書館」ではない。「プログラム」や「データ」のファイルを集めたファイルである。カタカナ（外来）語については国立国語研究所が分かりやすくする工夫の提案をされている。大変意義ある試みであり語彙を更に増やしていただきたい。12月に発表された中間報告には注記の項があって柔軟な対応を求めている。カタカナ語が使われている場面によっていろいろな言い換え語があってしかるべきである。「ホームページにアクセスする」は「ホームページを閲覧する」という方がピッタリする。

外来語には略語の問題がある。「FD」は情報関係では「Floppy Disc」である。しかし教育関係では「Faculty Development」の略として教育者の資質の向上に関わる問題を意味している。括弧でもつけて日本語の意味が書いてあれば大体想像できるが、FDだけでは異なる分野の人は想像すらもできない。質問をするのとはばかられて対話が進まなくなる。

言語利用の基本は自己満足ではなく、相手と意が通じることである。この原則を踏まえれば多少は言語表現も良い方向に向かうのではなかろうか。その分野の専門家同志なら符丁に近い言葉でも通じる。しかし分野が異なればまず通じないものと考えて略語や外来語をできるだけ使わず、一般の言葉で平たく言い換えるべきであろう。不特定多数の読者・聴衆を対象にする新聞雑誌・放送等における言語表現は特にこの点に注意がいる。コミュニケーションの真髄はこの原則を常に忘れないことである。やや飛躍して言えば言葉が通じないところに新しい学問の発展はない。